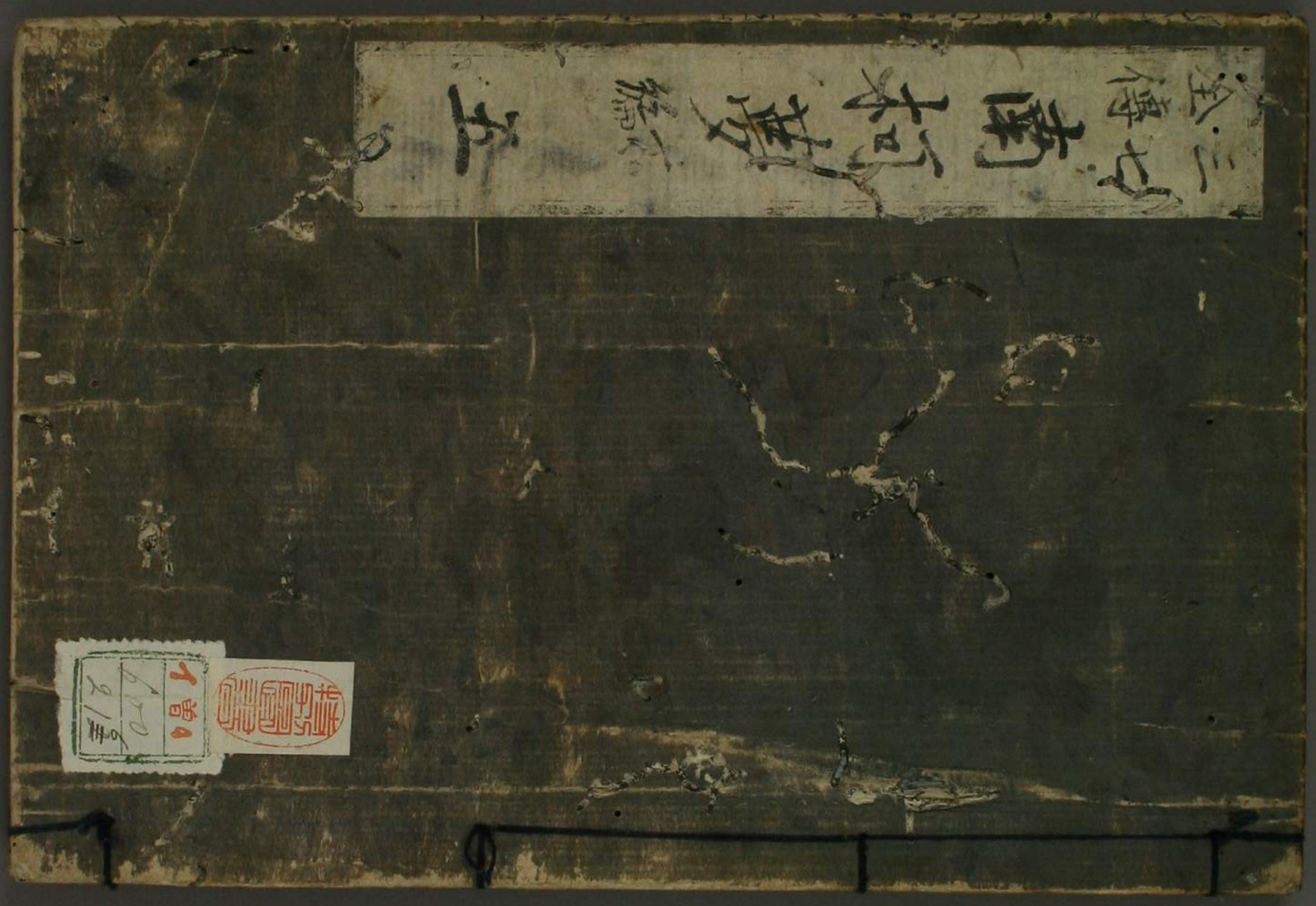

600
216

三七 全傳南柯夢卷之五

東都　曲亭馬琴編次

羇旅の宿の上

羊七が宿かりし皆戝の客店い。驛稍盡処ようく。ひとちんせるる家うれど。昔ちのぶの生茂る。埋も井の車とくも。良上久しくくちりて。祖代天井い中朽ち。雨漏よ煤を彩色壁の腰張悉剥ち。長押より月をも引べく。高麗縁の席薦。ところ〳〵切ぬ。藁を綑とも〳〵。故事もちひ出られ。竹縁い斜よ朽ち。絃彩〳〵弄よも似ち。されば旅ふ一夜を明すも。或い廻國の後行者或い伊勢參宮の男。童。囉斎物そのを見うれど。ちる米いそるくちり出〳〵炊〳〵。枕一ツを備りて。燈火ぐよ置ぬ。ひとれの一隊。鼻ちり脱る沈戸ちく。小曲ち置〳〵く淫ふあれば。穴の踊の

念仏を唱答く。物おもゝげひする題目宗あり。声の高たい山里の老翁。
眼の光るゝ陣曲のゆゑさまゝ。ねぶちとゝ。草鞋穿うゝれおうと罵
る。管笠潜潰されと同彩の面。汚ちりまゝ。いたまくもをし。衆皆出
去たる後ゝ大風の俄頃より風さるゝ。掻あとち〳〵風の外まゝとり遺たる
ものゝ。せ茂ゝ〳〵ゝ。もあるひまゝ。三勝ハ一間を借て。病たる夫を臥せ。
破襖ゝ。出居のうゝを塞られば。ゆるゝ袴とものゝ。ゝもあれど。昼夜
ゝゝる彼此人のうち語ふ声を聞ゝ。慰る日もあり。又ゝぶらゝよりゝ
ゝ。世を視ぶる夕も多ゝり。ゝとまセハゝゝより。ゝひの
外より。日を過ゝ。物ゝみ佶竭ゝ。ゝすべゝ。常言より。せゝゝ食ハ。
山も空〳〵とゝ。ゝゝゝる恥を忍ぶゝも。夫を侍ひ。幼児をも餓ゝを
ゝゝ。三勝ハゝゝ〳〵志を励ゝ。お通がりとあゝびの三味線ハ徙ゝと
惜むものゝ。れば。近辺を出るゝたも。彩李の中より包入れゝゝ。ゝ来ゝゝば
も破ゝたれハ。ゝのゝゝゝ賣ゝ〳〵。三勝ハゝゝゝゝ。究竟のゝゝれ
とゝひゝ。毎夜ゝ笑をふゝ〳〵。たのびゝ〳〵。彼三味線を抱て。街を
徘徊ゝ〳〵。のゝゝ停立ゝゝゝゝ。ゝゝゝ梛節（後投節と記録あり野ゝゝゝゝ）を謡て。粥を
ゝ。米をゝゝ。その日〳〵をゝゝゝゝ。ゝゝゝ睡ゝゝゝ。ゝゝゝ
ゝゝゝゝ

賀ゝ生らびて出るが。又や旅寢よ病鳥の。妻子よ憂を[illegible]こと。
[illegible]病着より苦しくれ。さを三勝が信く〜く。頁の終日看病し夜の
和を恐び門よ立。親よ三人が面の緒を。こすぢの糸よ繰[illegible]る。そめこ
味線のまの内を。受る扇そ名もそ[illegible]。家の右夫のうしろ[illegible]
杜山紀伊山。降至と今の離節も。とらの人まい馬耳東風。ゆる時ふ
も藝い牙紙。助るほどの薄命。大和よあ〜く三勝を妻と〜も通を
産〜まい。乳母よ抱〜傳て。假初の出居よも。商人ホよい會せも[illegible]。それ
悔〜といとらねど。それ[illegible]よ三勝まいく〜その物とらとて。家ふ[illegible]
ると食をさつえつ存命ち。えて世よあるゆひもす。白河よて死ぬ
ひし。彼が心糠をいろ〜まいすぐさふ。ようま六年生延て。いとぶ歎を
さ〜ぢり。貧の病よ身の病片輪車の足腰〜とりとられ。[illegible]。

愬小ぶ牙あれぢそ。彼ホい人よ寄ぎされ。それ[illegible]い人も憐とろ〜[illegible]
が給事と。五さるもあろん。親いく〜ともまい育。歎くい愚癡歌。ま
をろ行ふ祝を[illegible]ふ父いふ[illegible]りあふ。園抗も今ろい。池〜縁や
締びん。り[illegible]ぢい恨ならん。ともかともぢ[illegible]ぶ牙を捐ぶ妻や
子の。浮む涙もありぬべ。とろひとろよ覚期ちく。さそ[illegible]の夜を行よ
ひと。ともちぜ〜く三勝い。その夜。五六合の米と二三十の銭をぢく。二更の
比及よ五ぢつ。ぢぶ夫の安否を問が多ぶ腫物ぢふ小枕さ。暁の炊ぎ洮へ
ぶどーつ。小夜更るさを。ま七ぐ腰を搔捺を。初未来〜ぢ徒り慰ぢふ。
ま七い今宵限ぢの名殘ぞと。ひ〜ぶ。ぢろよげようち暗潭つ且〜と
三勝い。夫の腫出るをえと。溜ぢよまを休めて物を引被ひ。ぶを搔抱て。
夫のひとりよ臥〜。徒勢とく起て火を乞。粥を煮さて。夫と女児よ食

しかれば餘まる程啜りて。終日看病をせの命辛艱難わ。比んなりあるべし。かくて三箇日の日又霄の間小街より出て。物をこんとする小かをわ昼寐をすんがまま。常よりはいそぐ。睡らぬ。まことに七が新をもさのやうあしうえゆるよ出うねて。とくする初夜。初更の比及みも向とをあるうよりしうねて。夫よりふすまの夜をいとぐらよ明くまで。翌の炬をいるまん。ちうあれ。今夜ちうねて食もすこしあるど。ふをてさく睡らねるよ。迹を慕ふ便あるべし。そ霄わ出どもありあんうとらるよ。ま七答く。いるうぐ才食のすこざるわ起居自在あるぞ。内の透ねぬうれが患とするよ足らどをぶともやも。嫌らしく睡らとべ毎夜のうるれが。邂逅わ出どもるのとらとども。翌の炬よ物飲てわ。ふ便う。更ね間よとくゆるとくゆりあとしわ。三揚ゆとさらぶうい。とべ。枕方ある火桶よ。火も活て。土瓶は湯もわるうく炉り。則へ登んとて。強て身を起しあるよ。通よ指燭を乗。ゆ行くあるよ。後ろの外橘わ。羊朽て炉りあるぐくわうふが。ゆるを行て物ちの。ぬとて。嚀よゆえあれ。さて三味線を袖よ抱たく出んとするよ。あるうをくられをうえ。毋行比みあるど。その三味線わうぐ才のよ炉り。返ぬと携る。高しふうどもとうるれが。折も叱らどもるのをわをいるくべうわ。四の徧よわどろくしれ。紛出て。人を闇とうあを。ゆぶや。大人しやうよ留主殿しと。多その陪従をうぶ。小麥の図るを買てるさるん。又との三味線わ。ばも破れ。海老尾も鉄くあり。皮張更てるさるん小ぶ。毋よ貸てうべと。嫌さんとうらるん。ちううべはを張ええさ。ちくりて来くあるれや。意。そ来ぞんやるて。よく留て。ちとうとうくく。夫のりて。注目し。尻切草履。穿て足ぐるよ。暗へと。去ぬ。折しもあれ。の夜わ合宿の旅客もるく。物ぐの毒只一人と。

絵双を
買へば
さんろう
看病さと
さんろう
とびやかる

歌そそ。ぎ七ホが次の間よりの夕餐も既よりならべ果て。鹿倫のうさをさ
覗れこの夜の長れよ。宵寝ちんいとを。ぞ。とうとうを一杯ずべんとと。
いひちゝすれば。ぐの男えうりく。さそも。愁よりあけれ間小。ゆり魚と憶
うち笑へばうち笑ひ。外面へ立出り。ぬて三稽わ。ろろ夫まふ引ぞつ。庫り
ぐるのぬ糸竹の。節さく音さくうちうねとどその外ちのけよ。紙処の
簷下よ立在がられよるゝ。れ物ぐの目白異のあうり切抜。紙の假面もあ
ぐ。擾ろ臂を曲物の檜の胴よ行灯棹。二孫の糸をうけ声も。ろく
ーうろ。ぐ。唱ふを一口よ。とどやけ。」と唄つ。ひろ御を徘徊と。
按ずるこの後宝永年間武にもまた[とどやけ]とうたこと食あり
ちうちうある人の冊藏ぬ。ぐと双方とうのを見よ。この圖あり。折ーも九月十八日の月出
ぐ。外より寒れ山里の虫の音。絶ぐ。遠礎の樋いそぐくうりそろ。世のいと
ぐど長とる。さる行よまれ。病臥ぐ後の宿とぬとあくさ。蹙のう絡

小隣る信濃岡。沓崖よろをれてぞれう急ぐ。冥土の旅。せめて一下筆に
遺さぐや。と墨汁よ筆ハ染ぬ。ぬさくふろひくそれもなぬ。とせんあせ
んとうひうるぬ。ぬ日未記憶ぐ。多賀莊ぬく女の童よ母が小曲を
教ーとうぐ。ぐうて。逼ひーうぐれよ教ぐくぬ。紀後よ。いいせんめとぬひとと
点茶やよ。ぬ色。ぬーーれ身ぬ。逼ぬを。ぬぐど。母のあり。ぬうぐぐぬと。徒然小ぬ
ぬうよ。逼ぐ。ぐーぬひてうぬといいぬ今宵の遺言をいひ。ぬせんれ。ぬいうね
ども。稚ぐうよ。物ぬーぐうりそれ。恥ーく。逼ふぐ。ぬ唄ふべりれど。三味線ぬくて
いいぬーと。ぐを掉をとうりとも。ひぐられば。父いうの。胸苦ーさを紛ぬ。微笑
ぐ。ぐれさ。三味線ぬくとも。唄ぐ。近ぐ流れ。赤ぬーぐぬ。唄ひぬーとぬそ
ぬぐれそれも久ーく唄ぬ間。ぐ忘ぬ。ぬうとぐうろもぬぐ。教ぬ。と。愛ぐぐく。小藤
のほぐぬ。ぐいられぐーぐと母親ぬ。忘れてぬれーー破扇を。遍ぐぬかぐ。ぬ抱ぐを

とり。声をあげて唄ひる。

○赤い物のもの〳〵

（左の唄は慶安二年の印本の草紙上の巻に張りえたり。編者の自注によれば一説に寛永の時分京童の小唄なりと云ふ）

そうそう。赤いものそ。むらさきのくさりくるま。数覚寺の二王門。百万遍の山影堂。天満のうめのき。赤つらの明王。天火。なつま。朱すぼう。いすり夜の狐火。祇園夜の犬子。山王の鳥居。猿がおりの赤み。早川まるのゆんど。もろうう。紅梅。ひさご。ひがるをびらめんみびどんを。ひだるのひつ〳〵。綿洞夜のきんちゃく。えんまうどの〳〵。ちりめう。小野木夜のうつ〳〵ぐみ。あい夜の山門。ゆのいのうつ〳〵。朱ざや。朱具足。ちのうら。猩々緋。高雄のもみぢ。ぶんの山の岩つじ。けーの花。みびいとうぐ。山不柿。ざくろのさくりの木のさくりめぶ。法りのさくりに。鱒のさーみ。りえび。赤がひ。赤がよ。赤うふ。ぐさのあーをのうにかり。佛ちぶ。ぐうのうちびる。が宗永の。

わうさん。朱盃のかのにべよ。茶盃のかのさくぶ。ぐうやとのづきん。とうきのさくぶよさう。朱ろん。朱ろ。ちやつら。ぼとろ。朱つが。朱ろめさ。王のもろう。ちゐぜんじ。さそんそのそうん中。あのやそうん中。と唄ひさられば。ます。ちぶ。ちもうら。矣ろく。長ろるを忘れもちぶさそうぐ。唄ねるそれよそうとの尽をそうた。書かれのとうとうの逼ちもあり。今父が教へ小。らく記ろく母が涙ぶ。唄ひて誉られぬくう。麿呂の餅ろつぶぐぞと嫌さ。ぶろく稚ろいひぐ。臭ある風情ろく。麿美ろ餅ぬろぶ。ちようれ記ぶら。ん。教ぬへといそぐろく。小膝すぬつ今霄死ぬ。又の遺言とも。そ。餘念。るれその良えぢち。唱ぬもロへちぶそそ。ぐろの調うち乱ま。俠えちどぐう。ぐろ。絢拍ぬろ〳〵声細く。長く小節。急る曲。只漫ぬろうぬへ。繰ぬて。教ぬぶ。ぬ通へまく。ぬひぬろく。母さまぬりぬ。三味線弾と唄ぶ。

たよりあどく。ゆりあんざる。彼三味線の張をかね欲。り。財よや幽ゆふいと
と近。と行るこぶる。父びよ睡を催ぢ。父へ女児をゝ引奇つ。らく記しう
忘るるよ。唄ぐ毋がりぐだり。誉もちん歎ちん。常よ暮るとと妹よ
とふよ。今宵ハ二更よ行もあゝ尼尿ちく来らとよをとれど立とるく
れ蹙の膝を枕よ睡顔。ぬび覚しても立ちねぐるの衣をつぐ
とゝんれがりへが壮士の勇れるも息愛よ。るるさるれ候ゝり。且して
隙うらゝ。噫ゝれあゝいひびよ。お義のみよ捨し命を。妻やよ
絆されく。ゝ。ゝぐ恨ゝさよ。死ちどはゝ大和る園花
が恨も散父の怒も解ねべし。ゝハ
嬾ちねゝ操ハ。比稀る貞女のおゝ。家を失ひ今宵又。られよさ
捨らく。夫婦一世の別ともゝゝ。ゝ慕し女児ハ母より父がらの。

面影を忘ゝ。羊長物の哀をも。る祇悲しくゝんざゝん。
蜘気もるくてちゝりり。毋よ孝行盡ちし。五才の倀ゝが三ツの緒
小ゝ。ゝ唄ふ弦も今。親の末期の役ゝゝ。ゝも過世の業因ゝら。
ゝ。ゝくも教ゝる。唱ゝをゝ忘れそと寝顔を眺く。暇乞。ゝるちゝと
膝を引。親ゝ餓ても渇ても。昔忘れね両刀ハ父の像見の乱焼。乱れね武士
の魂と。押戴ゝく抜ゝるら。襟ゝろゝ。ゝく中刀ハ。腹へ突立とする折
ゝも。向近くはゝる足音ゝ。ゝハ三猿が呼ゝ。と刃をゝくちびゝれゝハ
らゝぐ。涙のゝの障ゝさと角ゝく。ゝハ暗ゝゝ。とどナゝゝ。ひとりぐら。
呵ゝと笑ゝふ声を聞ゝ。甲夜ゝよ歌ゝ。ゝ。ゝ張宮ゝ。彼ゝもゝゝ。ゝ猿が帰
らぬ隙ゝと。ゝゝそゝく。又ゝりゝほゝと刃の光ゝ。不圓目を覚を稚児が。
泣出ゝと声ゝよ。ゝれてゝや。三猿ハ端ゝく。走ゝり。ゝゝ。ゝ結ゝと。ゝ。吐嵯と内ゝ

死で入り。夫の養子携著。ぐる欲も翻り。たらくと落る涙と米搗て
雑しる周章く。ま七声を励ましく。怪我ちて其処放ちと叱り退れ
ど三勝いおほ引留る一生懸命。縁故はそぐり。放いぢと携る
も。涙よ洗ふ氷の刃。反退んとそれどまセハ。病疲をくとふよりちど。
ちろ顔よ焦燥く。縁故をぢんとあらぐ。かをとそらくちりあれ。てぐ
るれ後よ向ゆく。留ろい却恨ぐとられをりぐ。三勝いその意をけど。お色が行
をろちりけらんとい物ゆや牡ひゆふ。といふをまセハはもゆど。ぢよかを。甲夜の
唱ふを忘まる。といられく女児い目を押
書ゆとといふ逼ゆをゆかて。ちく記けりゆる。三味線を弾てゆられ。とい
ちゆるも泡ちく。さそい釜くの遺云をる。れ後ゆ。ちとて。女児小教れ
ちくる欲夫の今敏よ三味線を。弾くそゆるよ遺言をぢく母説いよ

もゆ。理ゆれる見をいらどとも。釜くよ。ぢたるへゆ。ぢらしゆくといをぐぢ。
ゆるゆい改をちち掉く。三味線ゆくちをちくぐは張り元ん宣ひ
たるふ。ゆどくくちゆて来ゆひ。ぢよほくくい弾ゆく。くくらも療養ふ
餅をゆちんゆと回答して死んとする父ぐる母のゆも。ちらぬ哀れさを便ぢ
くや次の間ゆる。猿客ゆ操持られも三そぢのいとけるれ。女児も耳を側を
ゆ三勝い賺ゆよく。ぢよゆ。ぢれをぢぐや。母いらのよを放されず。外
ゆぐく彼撥音よ。ゆくく釜くの遺言を。ぢくくとゆふ新を。ぢ聞れ
つちら点改母さゆい泣ゆゆ。泣ゆ花ぢまほくくゆ。唄ひ行ちん。ぢゆくとぢて
ちてよを勝よゆれ。稚れ声をちりゆげ。彼三味線よ。ぢ。泣ぶをぢゆ正月
みをゆ。ちゆゆく四よ猿寝くく。木曾の桜ちちりね。世を蛾捨の
名ゆ。病て伏屋の里遠く。行ちちえの山鳥ちくゆ啼て更級ち

阿遍
遺書
を
唱ふ

田舟の[illegible]の新[illegible]ぐ。[illegible]れば[illegible]十限川。[illegible]儒さぶ袖とつまずの神も締ぬ。えまゝとて。契を[illegible]るが嶽る。[illegible]ば。[illegible]の畑とゝちのぼる。[illegible]を。さゝと久呆路の橋。[illegible]の湖氷るとも。[illegible]者井よりるが。東方の[illegible]陽の東の間も。寐覚の床の寝[illegible]もそのちゝるりしあさおい。ゝゝき木とゝを墓ふらめ。かゝる歎[illegible]よあちの[illegible]もとえて[illegible]坂よさゝえゝと。ゝふぞゝりぞ愁よ。ゝをゝち月の駒や食む。ゝゝ[illegible]世を去る夢科の。言の葉[illegible]とか紀で遺せ。

とゝゝひ果ゝが二味線も。この撥をぞあさめる。三勝唱歌を[illegible]ば。悲ゝ[illegible]る限をゝく。病ゝゝゝよ身を恨ゝ。ゝんとゝひ定めぬふ。理小似て理ゝゝど。ゝよ殘ゝる妻やゝのゝも精ゝぬゝゝ。ゝゝらんとゝゝ親と[illegible]ゝ。警ゝ三ゝの一の備ゝ。ゝゝゝゝよゝゝゝゝ荒[illegible]ゝも。夫の必死を殺ゝとゝゝ。神の[illegible]れ[illegible]ん。殺ゝふゝゝゝゝ[illegible]ゝ。[illegible]ゝ[illegible]ゝ。[illegible]ゝ[illegible]ゝ。[illegible]

女児が物ごとりまて。ゆも月とびあるめ。おのれわ笠松平三ゑり。去りゑよ今霄。
の驛路ゑそゑれよゑるゑく絃歌を賣。彼此の門よ立在女子あり。笑りく
面をゆくゝたれどその声を聞くよりゑ女児ゑ仕りそれゑとにあぐゑ
ゑゑくゝ頭どゑよ立ゑりゑく覗ふよ。果ゝくゑそれゑ。花ゑゑどゝゑ
ありしゑど。ゑゑづ四月が遺言の題我ゆんゑ名告もあゑどゑの三味線め
きゑるものをゑゑめらゝく擽將ど。五十よ月ゑ老がよよと。稚ゑ孫が遍小臣
彈ゑふものゑ愛ゑゝゑ声を聞さゝ俠の種。悪びゑれゑゑ窮柱小。撥の當
度も定ゝゝどゑゝと戻る糸巻よ。音締も湿ゑ憂ゑゑ。恩愛の枷ゑけゑ。
四月が自害をひゑ留る。洞ゑちどの不骨者ゆゝ渋ゑゑ張をゝゑ。
東の果ゑゑ呻吟も三猴が往方をゑゑまほゝさゑゑゑども歌ゑ
あゝゝてひゑどゑ墻を殺ゑびゑとりひも果ゑどゝ寄ゑ。矢庭よ取を

奪ひとり。ぢゑゝ鞘よあゑゑ。三猴よ遍ゑゝゝ。ゑゑ三猴ゑ。ゑゑ三猴ゑ。ゑゑ三猴ゑ。
三猴河原ゑゑ。四月を人よ奪ひ去られゝゝゑ。ゑゑとも脚平足平を
殺ゝたる罪脱ゑゑゑゑひゑ。その夜洛を逃去て四年あゑゑを奈良ゑそ
ゑゑ。高天神の茶店ゑゑ。領主の代ゑゑとゑぼゑ武士小。割籠を恵
ゑ。大佛のほとゑよ到ゑゑられを披けゑゑひもゑけど飯の中よ一包の金を埋ゑ。
三猴が身價と字ゝたり。ゑの為体いと怪ゝゑれゑ。縁故をゑゑよゑゑ
ゑゑ。豫ゑ三猴よ由縁ゑりと字ゑ五猴よいゑゑと。赤根半六ゑゝのゑを問ゑ
里人答ゑ。彼人ゑゑ。その児ま七といふゑの洛よゑりゑ三猴ゑゑ。ゑゑ繡ゑ
逐電ゑゑる罪ゑゑゑゑ。永ゑ出仕を止ゑゑ。直新ゑゑゑゑゑゑゑゑ。
至ゑゑれゑりゑゑ。三猴を奪ひ去たるゑ。結髪の夫ま七ゑゑゑゑ。
ゑゑれゑ方人ゑ。徒と挑ゑ爭ひ人を殺ゑ大罪を。犯ゑゑゑ

りとめ。とどめすごて一言ごとれよわ者さ。さぶてけ。と恨をあげて疑ひの屈解ど。彼金を投ゑ。の彼がそりとらひ。逆と。その細しをもんたよ。南都ふ乞食して年月をゑちが。終よ泉の往方もたれど。今ハとて彼地を立てすれそれより諸国の美場を順礼して。此秋善光寺へ詣ずる。彼此を呻吟ども。はじめより件の金ハ一枚も喪ハど。年も祀ね小曲を唄ひ。路ちぐらへの門ふ乞取ると世よ存命たるのひ。あり。去年の志い孤ーたり。面をあひどもあれど。彼ゑ夫婦が中よ儲ゑる女児とれハ大和よ。ありと。ゆ。ーー。ま七ものゑりとい。襖を隔て三稼が。夫よ。ぶ。と。ぶ。ゑ。ゑ。ゑ

贈りしく。そのちぐめ三郎を。結髪の妻あさんありとこれもちらぶ。彼を奪
去て。君の凡悪名を雪ぬ。直ち刺殺して。これ又自殺し。情慾の為ゆえ
ざる。身を潔ちんものと。只管ちと定られど。恨もなたの女児を虐る。その罪い
と深し。ゆえ三郎が身價は。その親よりへぬ。ふべしと立條ある。旅宿して貴
君氏と後のゆさく相語ちたしが。彼人言を食むして。件の金を設るく。ちるよ
れ身は氏をやりて。その金を喪ぶ。艱苦を厭はで三郎が。往方を索めゆせ
よ
ゆも稀なる大丈夫。ま七ぶ不ゆあるどいと頼りくゆくと。頭を稱賛志
たりしぶ三郎も又嘆賞も。平三笑ていなれ。女児を急くはさしたれども。
彼が形貌の嚴骨を責く。自の老樂をとろらんとそぐらぶられ志気ある
ゆく常く。只凡身夫婦が孤忠烈は。日月同しく落ぶしたる夫ゆとらの妻
あり。誠小一世の奇耦。天の結る浪縁く。加之孫女児が怜悧なる。密止も父母

小似くいと愛ら。年はいくつぞ。名は何と問ふ。答へ雄ゆの扨を
ひらく。年は彩名は何色と問れ作り。日未毋ぶ。そなるゆも。祖父さまの在すとひ
ちしあるいらぶ。ぐんちくはしらひ作りいるそもちゆあり。答さゆ毋さゆ中ゆく
と。答られゆいといりけるく。言の紫は又二親の。袖ゆも。ぞあるる。平三は自
を押拭ひ。膝ゆ色を引載しつ。ゆる女児を。からゆぶ。死んとゆる親も親。
恩愛の絆ゆ。賢愚剛臆の差別ゆく。猛お勇士もゆらねゆを。鬼くしく
もるゆられと恨むも親愍の喞言ゆり。ま七は平三ゆ練られて。終ゆ志を果
しゆどこは死るゆも死れどとく。ちぶ〳〵歎息しゆりゆる。ゆゆられ疾は既
小更くゆく。宿のあるぶ臥たる。套房の方へ遠ゆれぶ。この件のゆを。ちら
ど。平三は膝ゆ睡れる。ゆ色を三郎ゆ抱ゆ。胴巻の財布ゆり。奈
良ゆく。ゆゆる負價一包をとり出ゆく。夫婦が間ゆ。三郎ゆ

若節ひまゝ〳〵どして今なほ彼が身價百金ありられをうく。まゝ〳〵
醫療ゆのうるよりちび身の病着ハらゆもさうぶ貧の病も又愈ゆん。ゆほく
ちんあくとゆん綸〳〵つられを遍ちちびず七郎を左有ゆ掉。男の好意つうる
ゆうるはこゞもその人ゆん。うぶ夫婦のみゆ用ひゞど。故いうとうれば前ゆ
もいひつうゆ。三務をまゝ七が徒髪ゆ〳〵。女ゆとちうされびゆて。厚ゆ舎
民彼が身價を投ゆ〳〵。その紀ゆ剛ゆうれ。ゆ〳〵ちびゆう。まゝ七が舊の
妻ゆうゆちうび。ゆの今ハ投もゆ。四身も又受ゆふべうゆ。ちうを今られとりて。自
を妻うゆんとちうゆうゆ。ちめのたゆもいうゆうゆん。ゆ今ちうの傷ゆう。祈をうて
厚舎ゆ返〳〵遣〳〵。又m身の一生ハ夫婦がともゆ〳〵也て難ふべ。ちうせゆ
式ゆ違ゆうゆちゆもちゆうゆうゆといふ。平三ゆ〳〵れて。いうゆ不實ゆちうゆ。とゆ今
ちゆを返ちびゆて。只一疾の中ゆ夫婦〳〵ちゆ〳〵ゆ。ちびゆ。ちゆられを借て頭茶ゆ。

病愈て後。その缺なを調達て。舊〳〵返をゆも遂ゆ。ゆうゆ
も平三ゆうちゆ〳〵ゆんとゆうゆを。三務も又ゆゆゆ〳〵言結を竭して。
ゆうゆ〳〵納得ゆ。ゆて次の日ゆうゆ。醫師ゆえゆゆ。價貴ゆ
茶品をも厭ゆど。それがゆふゆ療治ゆう。ゆうゆ宿のゆうゆ
夫婦ハ平三がゆ七ホとゆうゆもゆ。遅留ゆうゆ至ゆ。ゆふゆも似ゆ
も後ゆうをゆゆ冴ゆゆ。閑ゆうゆど款待〳〵ゆ〳〵ゆて。ゆ
二十日ゆうゆを孫ゆ。ゆ七が病着ゆうゆ。閑ゆ果ゆ足舊のゆ健ゆ
ゆしゆ。三務ハゆもゆ〳〵。平三ゆ〳〵款びゆ。ゆ七ゆのゆゆ。ゆ〳〵ぬ
藤舎ゆ赴ゆうゆ。ゆゆ〳〵ゆ浪速ゆゆ。ゆ〳〵。仕業をゆゆふべ。彼ゆ
ハ洛ゆも遠ゆ〳〵。ゆれ又土地の人気をゆられゆ。ゆうゆ便宜をゆゆべ
ゆうゆとて勸ゆ〳〵。ゆゆ七られゆもゆゆ。親ゆ四人。遂ゆ皆出をたち

生。更に西を作て走る。十日あまりまで。浪速に到る。長町といふ所に
に備家して。ゑみのりともに膝を容と。伝をぐる佐業にぜんと浅まる。
平三が原来俳優のるに熟て。髮曼を作るにそろをけられ
どもつねて。入髮とゆめを作りそめ。また七が毎月に彼此にあく出て。
これを鬻ぐに。改髮をもねめ。改髮を考ずるに究てとて。
買人も多くりて。そのち三傷。又養髮とゆめ假髮をユヤして平三と
ともにこれを作る。初に。そめの入髮が。改髮のきれど。養髮の髮の
濃紅を掩るれば。魏宮に蟬鬢を製そめ。緑雲擾てて曉髮製を
梳るがごく。婦女子大に弘重し。養髮を作を生なれば。三傷また七を
綽号して。長町の養孤とゆめ。なべに。
ゑきりの人いちべ。隠養屋と世をゆのぶ。まもなくの外に。商人とゆ

住が又住よりの。岸の姐松年預御達。假髮めされまの外にも髮結習掃
玉櫛笥とゆをとを近く浪速津をなあるけども皆往まく。数日の療治
小三傷が負價を遣ひ減らべらに来ゑ佐業を改めも本銭緒
雑費とれ彼二三十金に及べるを。ほぼ贖ふに至ゑどいるもて。件の金を
舊の数にあり厚倉二年を夫に返さどやとく。親に夫婦ゑれが為に
いくそのひを盡し。夫が所も活業に解らど。妻が又節倹を宗とて
飲食も薄くまれど。毛より細紅瘦世帯まく。二三十両の金を怨地
小貨道ひとべうもあべられのまるべく。また七が父が六が妻名ゑろも
とゑれがちのひべに奈良と五條のあ侍を探問にまれが今の母と
めれべいとゆ老らべら。家を見が。一トさび想思病ゑうち臥て。
たゑべ首を撞ど。この七年が程。死もてべど佐もてべど。されべ典禮

蓑髪
笠松
蓑
さんぐろ
あつう

夫婦ともに、まことに、まことを恨み。女児をさまざまよりて諫めらるれども、園花いよいよ志を固くして、ひたすらに縁を結ばんとすれども、園花いよいよ志を固くして、けなげ。只且も暮すもぞ七がるのこと。父もそれ〳〵いろこびいろこび懼る齢なれども、罪深き操も不便あり。父を捨ひ彼世を慰るよりもあるべし。二勝もこのことを笑ふ。園花が心の中をおもひ計り。夫をありがたいぞれも他もろとらぬものをとり。ふ夫婦在命。限速よりと笑ひあるべきぞ。とおもひあらん。とこび縁故を笑えんとおもひ。後わるべ月日尼よるべれと。ありの程を三七日告夫が大きむ。ふ。あらふる神佛に祈けるぞ。

主ある園の花

さても蛾松典膳が女児園花は往年十七が舞〳〵と奉りしと笑ネ。姉〳〵とふ氣をふく。只涙の形ふたを歎くのぞ〳〵望を失ひてぞ。とふやうぶ夫そ。人とふ。その心ざまは負しけるとべ。舞〳〵ふんどふ。惑し忠孝両ぶ鉄ふ。彼舞くハ豫ふ笑えぞし。ふ。雅馴保の結髪おさんどのと中ふんあくハあるぶ。ぞふ。彼人存命ふ。洛ふあるふ環會。己ふ。迹を留ふ。ふ。ぞれかくまれふのふ。深た瓦ふそあるめとふ。遠く慮るほど墓ふたりのハふ。涙の雨ふ。枕も打。拍り目解ふ長總の長さ病ふとふしふ。針灸藥餌も驗なし。又母ふこれが為ふ。ふ。胸を苦ふ。さまざまよりひ諭ふ。ま七がるの代ふひ絶せんとふ。

郎病をうれふるのあまり。只典侍も憂慮も憤を忍びて。まづ七がへの風
いひも罵らず。この花は又密夫五條へ消息して。をりをりまた六が安否を
問。これは日来嗜まぬものゝ。彼は堅くぞ。ふん歯みあひもうんとて
挾めの廣りの魚肉野菜調理して。るを贈ぎし。又熟虫屋のへべ氣の
結まめうんとして。佳酒を贈るとたもあり。春のとろり冬のそどめ
ふは。衣服の洗濯ふも心を著て。うるづえくねやうに。賄ひ遺をふ。
又母ふはふく匿してそろ利なる奴婢。只二人よこの條のみを与らし
けり。また六は。園花がかく信ぬるふ感涙を拭あくどいろるんべ半七へ。
諒をくるを舞くまひうえて。かるる負女をゆり捨て。さらく虚花
のあはあくざしが。舞くとふ老狐ふ魅られ。親をも妻をも忘ねよ
九ッの学よ生は変るとも。また七はうが子ふあくど。只園花のこ実の情と

ひ進とるとて。心がそれ限り書写る。返るとる日もありしとぞ。
かくて春去春来ろて。既よ七年をこせりさのろ誰ふとろくど。
また七は彼舞くを妻とて。俄速の片ほろ。長町とふとろるあり。
今は商人とうりて。養屋と成と。假名とふのを醫南て侍業て。
お通とふ女子を産て。既よ六才ふろ。天和へ十里よ近ふね浪速
津よ住ひて。学をも人をも憚ねる。嗚呼の白物ふれとて。藪中ゆ
て風声を。園花かえ母とれを伯父て。一トくびはまたが忌ふと弱くど。
又一トくびは又母ゆ伯父ゆ。主君の威勢を借て。いろる崇ろ
めじあふどんとて。更よ安をもろ。あるとて又老ゆ。またわ〜よ
不慮のるめて。こるこが牙の姫ふく。又よ勧め。ふためんもるん
ぜの人はいるべ。ゆゆ夫。舞くを侍ひて。竹國の浦よ在とも。

外なるべきの安否をもとゝたゝ慰むるもなれども。こゝが身の心操の
言告やうん便もあらざるこの風声をひ正のとゝろと胸ふ〳〵く
ゝよ〳〵しも。果〳〵典膳も。はせがるゝ〳〵ゝ。大き怒り。密に密浪の
縁由を物のゝ。彼ゝ〳〵。年来の憤を散さんとゝたゝを。婢竊
笑〳〵。聽ゝ園花より〳〵と告るゝれば。園花打驚たゝ。さんがこそ〳〵
ゝよ〳〵遣ね。今ハ只ゝ方を教〳〵又母を薄夫を救ひゝ年来の誠を
をもゝ〳〵ゝ。ゝ〳〵。ゝゝ〳〵。ゝゝ〳〵。ゝ

曲者
園花
園花

る人をもゆゑ起出ずハ。近曾頻と風邪あり。ま七がるのゑ
べ。さゑあらぬと同。園花ハ只俊さ。こゝ。こゝ。こゝ

を夢みのごとく七年をうせぬ。されど嫌ふ。男を阿容くと
恨速まぬ。ゆゑに恨をいうべき筋なし。化生舞くの俳世さと香ん
花の。三拷どのと園花を。譬くいうぶ深山木の。実のある果をかくとぶふ。
笑えるしく笑まるのぶ。恥の辱ふく仕ぶうん。又理を責らまうふ。假
初の捨言塚。のけらくとも子さくある。妹夫の中を引裂く。妬婦と
学ぶ疎ま。紙目の合ぬ蝶番。閨房の昊風の立らも。うくてふ連添うひ
もぶ。学ぶ白人ある捨らまー。冬の扇の骨ぞう。病髄さあうぶ。
うれうう倦まる彼所ぶ。あけと寛ふい情ま。ふの顧くふい彼人ふ。異
ぶうもあうぶーて。のく百年も世ふ栄。吉野の花れ風ぶう。大和の
うもれうぶ。ひ世くくあうぶ。ふ花ふ実の後もいうぶう。喜くく成佛
いさとぶー。親ふ先ぶう不孝の罪。ゆーあくと合と掌ふ。隙蔵る

涙の瀑布。岩ふ堰くぶくあく。されくも未ふ逢んとふいかね操を
母親ふ。ぶふ実ふえどとにふいふど婚終
慌ぶくぬふ世の中ふ。人ふうふくあるめを。親も及ぬ幻想を言の葉
ふふふの葉ぶうあ。いひふうさねば彼人のふるうもうるぶ。母ぶあー
うふ汗ふ。なのうもうち仕ーあ。曾ふ帝ふ七ぶ竹馬の友
うれぶられをふふとふひふ。けふ宮ゆうふに男ぶ年ふの物ふひと母ぶ
ありふ狂を。審ふ学えるして相宿うれば。彼ふぶうふ恨速ふ赤ふく。
すさが長町とゆふんの隠家をうぶ。時宜ふうんべ弱面ふく。縁由と
述。その意を学ふく。なりふべーとふひ。うや置去ふ学れて
婦の縁ーふいうぶ。断ふてぶ。墓ぶ應を学ふく後ぶもかくもうるぶ
ふぶあふゆふ遠ふーあふふぶうふの果ぶうも彼ふどぶれぶふく

主を恥じめ。さすがに母が憤をたゝふさんとふるあれど。彼人もおのゝ
又四方が操もそぶく。ゆうふのうとなるぬへ曾太郎が。なりて後ふるへ。
雨降そぶたく土間ふとゝくば又ふたるもうるうどやへとさまぐゝ諫し
ちゆとば。園花いゝうち伐ゝ。ふ物倅すゝうが才ゆえ。ゆえ上のそる
ゝると。浪速へ到るゝと欲。それを推辭べふん慈ふ。情ろ不孝
をゝふゝんいふゝんとて伐伐む六の花も消う孤ゝ。今や七つの
間ゝう。十三鐘とゆうゝもふ。枕土圭も落とゝゝう。いざ
睡ゝゝと母親ぞるまも亀え。才日冷る淚の氷ゝうゝも。
臥簟の内ゝ涙ゝゝ。ゆうやく自叙をゝめゝゝゝ徑
ふ殘松曾太郎ハ母貧浪ぞものび步ふ。暗潭ゝるゝと
あゝとゝゝ。俄頃ふ浪速へ到ゝゝ。ゝゝゝ隱家と見その

為倅を慰ゝ。時冝ふゝゝが面あゝゝ。妹ぞ心操をもゝゝせぞやゝゝふ
ふえ才孝ふふゝゝ壯伎ゝれば。ゝぞ才ふゝすの出才ゝるゝちゝつ。西言出
仕せぞるゝゝ。同僚仰ふゝの。ゝゝ又ふハ法隆寺へ詣ゝとふゝゝて。
次の日俄頃ふ彩裝を整ゝふ。冬の日の短くて。ゝゝ申下刻ふゝぞゝ
けゝど。ふ忙ゝゝふ。從者只一人をゝゝ。慢ふ立出ゝが。路一里ぞゝゝゆゝふ。
日も暮ゝゝとゝ。ゝゝふ急だゝ。矮袋をゝゝゝゝ。廚ゝるふいゝと便
ゝゝそ。從者をば其ふゝゝ才ゝゝゝ。尻が辻ふ到ゝゝとゝれを待ふ。既ふ初更
の比及ゝゝぞ。そのものゝゝ才ぞゝゝゝふ待ゝゝ。遂ふ巷轎を備ふゝ。
階巔を越ゝゝ。そのゝゝ二人の憍夫ハ蒹ゝる樹の下ふ橋を拔ゝる。
ゝ。ゝゝゝふゝゝゝ。難伐ゝる巔を越ゝふ才重易常ふ徬ふ
ゝゝば節骨を痛めゝ。彼も我も脚氣發ゝゝ。今ハ一里も運動ぐに。

定めの建場までは今はいまだ初夏。こゝろ暇をぬすべしといふ。曾太郎
これを悦ぶ。汗巾うち戴くるまを〜橋夫出病病とあとばせんとぐ。定
の示すぐへ。遥うれど。足の数のごとくそろさるこゝ。腰うち打
違の財布を解く。残三緡を遍ちんとさるを。橋夫は手もつゞで冷笑ひ。
とらふやひさぐ。かゞうの駄賃をぬすんとてこゝ。乗せ定の
外うる酒賃はさらに。脚氣さ發しぬ。ものの價をぬるべ。いとゐつた
うと咳みぞ。曾太郎。又一緡の銭を惜〜さ出さを一人の橋夫掠取ゆく。
碾と投ぐ〜〜眼を睜。声をふり立。百二百の半銭ぬ〜。人の命を買ぬ
ぬ。こゝ我を欺〜みとそ。こゝ見てけば。残る一人もてゝ言ぐろいんは干遠〜路狠
も衣服も脱ぐ〜遍ちぬ。左右うり掠〜ぬと罵もあくど。左右うり掠〜ぬと罵〜く
競ひ慕ふ。曾太郎忽地大ゐ怒り。さ〜かは汝ホ賊ゐるよ。孤客と〜ひ蔑り。可
惜首とる。腰ぬそとあざ〜笑ふ。立ゐ目前へ。肉ゆを息杖を立と衣へ
入猪〜。直ゐ撲地と打落せば。ゐ。朽惜ゐ〜〜ゐ〜〜ゐ。細著を拂除頂
髪捉ゐ〜雄ゐ雌ゐへ。撞と投ゐば岸破と起。倭僂ゐ〜〜前後ゐ。狙ん
とゐを。著ぞ。足を抵〜〜丁と蹴倒〜。ゐ首背へ。掉胡〜。橋の
ほゐへ押著つ。結下ゐる挑灯の火光ゐ〜。ゐ〜〜ゐ〜〜その面を見ゐ
ゐの轎夫へ。別人ゐ。往ゐ南都を追放ゐる。今市金八郎。布施蝶
九郎ゐ〜〜ゐ。曾太郎〜〜怪〜〜。羨を〜〜ゐ愚物ゐ。蛾松曾太
郎を見ゐ〜〜ゐ。ゐ〜〜ゐ。ゐ〜〜ゐ脱ゐ全八蝶九郎ゐ。その人
ゐを認〜〜大ゐ驚ゐ。ゐ〜〜ゐ。ゐ〜〜ゐ。慌忙逃んとゐを起〜ゐ立ゐ。
ゐと刎。技〜刀の脊打。肩腰の嫌ひ〜〜。街ゐ〜〜ゐ。待ゐ〜〜ゐ〜〜ゐ。
頼の光賊。ゐ〜〜ゐ景迹ゐ〜〜ゐ〜〜ゐ。ゐ〜〜ゐ不忠不義の天罰ゐ〜〜ゐ。

閻魔小曽太郎
悪魂を懲らす
あり松豊太郎
今吉全八郎
市絶蝶太郎

却悪心増長して、旅客を引剥せんとの心さとそ。その罪許し難し。
浦の旅宿に入べ。奈良へ帰りゆくことを、さぞ。
首を縊るべ。
ても羨ぶべ。ゆゑ悔しくどやとのひ驚ひ。又数回寺泊どふ。全八蝶
九郎苦痛に堪ず。ゆゑ思ひ。并に泣くと叫びけり。そのとき客人
刀をおさえ。腰に著る小挑灯をとり出す。燈る挑灯の灯をうつ。
遂に狼速をさぐるに、そだ去ぶ。更に探れば。その夜八平岡に
宿りて。彼役者を待ち。次の日従者に深江に追著けるとぞ。
祝に全八。蝶九郎に。やくに永を記くぶ。ぶ自脉を珍。寄まされ
ことうくに唾を塗く拭ぶ。直と呆れて。目をえあつ。蝶九
郎ろに。今夜稀る孤客を案じられ。ぶとそとひる
に。幸ることなれば。眼も眩く。紅くなりぬ。

臣が辻ぶく足を定ることなく。汝も吾も。曾て命なりとひうけど。可
惜肩を貴し。剃ることわを入る。忌くしと呼ば。全八も面を顰
め。七溥八記とのべることもあり。つ。ことるもあくてやへとの。蝶九郎
かさみく。ことるとのべ。ぶ。ことるを。つ。汝もこれも恨ある。赤根ぶ七
八。彼三郎を妻ぶく。狼速の長町にありとぞ。のみ実なぶぞ。
密に這奴を結果。三郎を奪ひ去。遠く東の果のど。賣遣さば。今夜
の損に補へべし。さあ。ねとのふを。全八笑もあくど大に歓びそ又
金の蔓に堀當ん。ぶ。ことあ是まで八名を名ぶも。ぶらぶ。
法人ぶに。ぶ郎れば。俄くぶく汁ぶ。ぶらせんぶ。せよと示あく。夜
山下に。ぶ。人もあ。ねば。ぶく。に。輝る。紅色もぶく。声高やうに。
遭つ。遂に空橋を打記。ぶれも平岡のかくとぶ。ぶぬ。抑件の

全八蝶九弟八。年以前ふ。奈良を追放まくらう。摂津河内の間を徘徊し。到るところ悪友とのゝ文盲〻〻ぬ不為をすると雖ども

猶ふ里人ふふ憎まぬ〻〻便うるうるに。二人のうるもふ旅輪を舁

生活よさるれど。恥をゝぶれが養るとゝの。動まば旅客を劫

ゝ。非法の殘を貪〻〻んと計較ぬ固ふ是憎てるる母。憎む

ゝ癖者ゝ。